Ten Pianists, Ten Colors～venus great pianists 10

十人十色～ヴィーナス・グレート・10ピアニスツ

1. ジョン・ディ・マルティーノ “ ラ・コンパルサ ”
John Di Martino " La Comparsa "《E. Lecuona》(3 : 50)

2. スティーブ・キューン “ シャレード ”
Steve Kuhn " Charade "《H. Mancini 》(5 : 46)

3. デヴィッド・ヘイゼルタイン “ ビューティフル・ラブ ”
David Hazeltine " Beautiful Love "《V. Young, W. King, Van Alstyne》(4 : 43)

4. ビル・チャーラップ “ ビギンザ・ビギン ”
Bill Charlap " Begin The Beguine "《C. Porter》(6 : 49)

5. ステファノ・ボラーニ “ アンジェラ ”
Stefano Bollani " Angela "《Tenco》(4 : 11)

6. ロブ・アフルベーク “ ベサメ・ムーチョ ”
Rob Agerbeek " Besame Mucho "《Velazquez》(4 : 29)

7. チャノ・ドミンゲス “ 牛と月 ”
Chano Dominguez " El Toro Y La Luna "《A. Sarmiento, C. Castellano》(7 : 45)

8. リッチー・バイラーク “ リービング ”
Richie Beirach " Leaving "《R. Beirach》(6 : 18)

9. ハロルド・メイバーン
“ イット・オンリー・ハーツ・ホエン・アイ・スマイル ”
Harold Mabern " It Only Hurts When I Smile "《H. Mabern 》(6 : 07)

10. エディ・ヒギンズ “ 新宿トワイライト ”
Eddie Higgins " Shinjuku Twilight "《E. Higgins》(4 : 33)

監修：寺島靖国

℗© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*
Supervising Editor : Yasukuni Terashima
Produced by Tetsuo Hara
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound.
Front Cover :© The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo
Designed by Taz

さて、私は1曲目にジョン・ディ・マルティーノの「ラ・コンパルサ」を据えた。1曲目に入れたということはどういうことか。演奏が目覚ましくいい。それもある。しかしそれにも増して私は「ラ・コンパルサ」という曲が好きなのである。好きというのは、これは、どうしようもないのである。優劣を超えた人間の素晴らしい感情である。どんな理屈も好き嫌いには抗し難い。というわけで、大好きな「ラ・コンパルサ」。古い曲である。キューバの曲。エルネスト・レクオーナという、アメリカでいえばコール・ポーターやジョージ・ガーシュインのような人が作曲したが、次から次へとあきれるほど卓越した旋律を湧出した大家だ。諸君もよくご存じの「アンダルシア」「マラゲーニア」「シボネー」などが彼の代表作である。その中でいえば比較的地味な曲想を持つ「ラ・コンパルサ」。「葬列」という邦題で知られている。まずこの曲を採り上げたことに敬意を表してしまうのである。アメリカに渡って「ザ・ブリーズ・アンド・アイ」（そよ風と私）のタイトルになった「アンダルシア」などは比較的よく演奏されるが、さすがに「ラ・コンパルサ」となるとそう幾人もの白人がレパートリーに取り入れているわけではない。私は「ラ・コンパルサ」を演奏するジャズ・ミュージシャンが好きだ。レコード店でこの曲を演っている人を見つけたら、無名だろうがなんだろうがいち早く買い入れてしまう。そしてむさぼるようにこの曲の持つ旋律に耳を貸すのである。なんというか、勇壮な哀しみを持つ曲である。めそめそしていない。哀しみが凛々しいのである。そのあたりの機微をジョン・ディ・マルティーノはどうです、立派に表現しているではありませんか。曲をすっくと立たせているのがよくお分かりでしょう。そういう意味ではバックのロックっぽい変拍子のリズムも効果が抜群である。ジョン・ディ・マルティーノのピアノは一部のヨーロッパ人みたいにしんねりむっつりしていない。速い曲では大きく弾けていて、そこがいい。そしてゆっくりの曲では適度なかげりがあり、そこがラテンの曲を弾くのに適しているのだ。原CDのロマンティック・ジャズ・トリオ『甘き調べ』にはもう2曲ラテンの曲が入っている。「ドゥルメ・ネグリータ」と「ある恋の物語」。これらの出来も上々で、そのうちぜひラテン曲集を彼に弾いてもらいたいと思った。エルネスト・レクオーナ作品集はいかがだろうか。懇願しておきたいのである。

2曲目は一転、気分は果てしなく爽快なり、の一曲である。私は「シャレード」が大好きで、これもこの曲さえ入っていれば手当たりしだいに買ってしまう。つい最近はホリー・コールにしびれた。ホリー・コールにではなく「シャレード」に。スティーブ・キューンの一聴野放図な弾き方が、一見ジャズらしくない曲想のこの曲を一挙にジャズに仕立て上げた。これしかないという絶対的テンポ。ビリー・ドラモンドのドラムが天才的だ。スティーブ・キューンいわく。アル・フォスターは天然の天才、ビリー・ドラモンドは努力の天才。しかしこのドラモンドは天然型の天才を感じさせる。それも曲想がそうさせた面もあるのだろう。「シャレード」をかけると私の部屋がシンバルだらけになる。私はシンバルまみれになる。その快感をどう言い表したらいいのか。

「ビューティフル・ラブ」も大好きな一曲である。今回はピアニストもさることながらチューンによるチョイスの容量が多い。スタンダードには飽きる曲と飽きない曲がある。彼らの生まれ持つ資質がそうさせるのだろう「バーモントの月」など昔あれほど好きだったのに。さすがご当地ソングと言われるだけある。「ビューティフル・ラブ」は多分、死ぬまで好きであり続けるだろう。「美しき愛」。このタイトル嫌いになりようがない。ヘイゼルタインの演奏はビル・エバンスの横顔を思い出させる。なるほどこの人はエバンスに端を発しているのだ。それがよく分かる演奏である。力強いがはかない。「ビューティフル・ラブ」とはそうした演奏を要求する曲、と申し上げておこう。ついでながら今回の10枚のジャケットの中でベスト・フェイバリットがこの『不思議の国のアリス』。この少女のオシリの可愛いこと。

全10曲のうち、ラテンの曲が4曲入っている。比率としては非常に高い。今回好きな曲を選ばせていただいたが、ラテンは私の先祖である。ジャズに入る前はラテンのファンだった。「ビギン・ザ・ビギン」はコール・ポーターの作品だから、正しくラテンと言えるわけではない。しかし気分は完全にラテンであり、南米大陸の人の作曲と思っているジャズ・ファンは多い。それでいいのである。しかし、それではよくないのがビル・チャーラップの「ビギン・ザ・ビギン」なのだ。これは、お聴きのように、北米大陸の「ビギン・ザ・ビギン」。簡単に南米の同曲にしてしまわないのがいかにも冷静なビル・チャーラップらしい。私はそこに惹かれたのである。ボストン辺りのお屋敷町の静かな一角から聞こえてきそうな「ビギン・ザ・ビギン」もまた、おつなものではありませんか。アーティ・ショー楽団の情熱的な、そしてエディ・ヘイウッドの不思議な同曲もいいが、物静かなビル・チャーラップのこの曲。代表作の一つになったような気がする。

ステファノ・ボラーニの「アンジェラ」。アルバム『ボラーレ』に入っている。「ボラーレ」にしようか。最初そう思ったのである。しかし私にも意地というものがある。受け狙いはやりたくない。まして次の曲が「ベサメ・ムーチョ」ときている。「ベサメ・ムーチョ」はいかに後ろ指さされようと好きな曲だから、これは出したい。で、やっぱり近頃急速にフェイバリットになりつつある「アンジェラ」。これでゆくことにした。このCDは全部が名曲と言っていいほどいい曲に溢れている。「アンジェラ」はその中で、庭の片隅に咲いた一輪の花のようにひっそりとした一曲だ。しかし将来的に飽きない曲との確信を持ったので選択した。「アネマ・コール」もいい。「アズーロ」もいい。ヴィーナス・レーベルの中でも屈指の出来映えの一作である。お持ちでない方はぜひとも。

さて、ジャズ・ファンにとって一つの試金石になる曲「ベサム・ムーチョ」。賞味するのもよし、けなすもまたよし。この曲の好きな人は旋律主義者であろう。ジャズの旋律を愛する人。反対する人は旋律というよりジャズの純な部分を尊重する人に違いない。「ベサメ・ムーチョ」が不純というわけではないが。いやしかし、私はその不純なところが好きだ。ちょっと汚れた個所。あやうい感じのところ。ロブ・アフルベークはこの曲に雄々しく立ち向かってゆく。くずれる方向に行かない。挑戦するディレクションに進んでゆく。テーマ部を一音もくずさないのがよい。ソロの後半で旋律が一段と立ち上がってゆくのが分かる。律儀な「ベサメ・ムーチョ」だ。私はベサメ・ムーチョ・クラブの会長？だから、この曲ならどう処理されようと一つの文句もない。

別にミュージシャンの名前でそのジャズ度を計る必要なないが、しかしビル・エバンスやバド・パウエルに正しいジャズができるのは分かるけれど、さてチャノ・ドミンゲスとなるとどうか。いささか考え込まざるを得ない。いや。これは冗談。ではゴンサロ・ルバルカバはどうなんだということになる。いや、ゴンサロよりチャノ・ドミンゲスはよっぽどジャズである。ピアノの強大なタッチがたくましい。強いスペイン男を想像させる。スタンダードも悪くない。しかしさすがにアンダルシア出身のドミンゲス。土地の音楽にさらに一層の輝きが見られるのだ。お手のものという境地のもう少し上の境地。「牛と月」がそれである。牛はともかく、月という文字が入った曲に悪い曲なし、良曲のみ、と言ったのは誰あろう私だが、「月と砂」「ルナ・ロッサ」「月の砂漠」「月光価千金」など諸君、月の曲があったら必ず買い給え。それにしてもジャケット。本日2回目のジャケットの話になるが、この曲が入った『コン・アルマ』のモノクロ写真は見応えがある。私は写真に写ったこういう女性が好きである。情熱的にして神秘的だ。こうしたジャケットを眺めつつ聴くと音楽がいっそう際立ってくるから不思議である。ドラムのジェフ・バラードは普段はもう少しむつかしい叩き方をする人だが、ここではフラメンコ楽団の中に入ったドラマーのようなシンプルな演奏を施し、うんよしよしという感じだ。

リッチー・バイラークは昔ECMあたりから盛んに作品を出していた。それで妙なミステリアスな「臭み」が付着していたが、私が以前原宿のキーノートというライブハウスで会った彼。これが本当にリッチー・バイラークか違うんではないかというくらい気さくでジャズっぽい人だった。よく笑う人だった。さらに驚いたのは元のアルバム『恋とは何でしょう』でリチャード・ロジャースの「美しき朝」を演っていること。この曲、スタンダードにしては卑近な曲で、めったにジャズ・ミュージシャンが取り上げない。そんなノーテンキな曲、できるかよ。そういう思いなのだろう。それを神秘主義者？のリッチーが演奏した。考えられているよりは身近な人、なのである。そんな身近なリッチー・バイラークなのだが「リービング」はいささかECM臭いというか、瞑想的だ。黙想にふけるリッチーといったところだろうか。リッチーはもう一曲「エルム」というオリジナルを書いている。これも瞑想的ながら「リービング」同様、静かな旋律美に溢れた傑作だ。探して聴いていただきたい。この曲についてはゴタクを並べてしまった。いや、何が言いたいか。1970年代に聴けば瞑想的かもしれないが、いま耳にすれば普通に見事な美しい曲。そう聴くことのできる現代とは素晴らしい時代ではありませんか。色の着いていないジャズの時代。

ハロルド・メイバーンは、特にライブをご覧の方はご存じのようにとにかく弾いて弾いて弾きまくる人という認識が強い。どっこい、なかなかのセンチメンタル・ジェントルマンなのである。70歳を超えた感傷親父が作曲したのが、いま皆さんのお聴きになっている「イット・オンリー・ハーツ・ホエン・アイ・スマイル」という一曲。どうです。あの顔相（失礼！）のメイバーンからよくもこんなラブリーでこぢんまりした曲が出てくるものだ。そんなふうに感心してしまいますよね。　メイバーンのピアノ・プレイはいつも同じ。同じフレーズを弾いてそれで終わり。みたいなことを言って私はさる評論家の方から叱られたが、確かにこういうすぐれた自作自演に接するとメイバーンをもっと貴重な人として尊重して扱わなければいけない。そんな思いがひしひしとしてくる。この一曲は小さいけれど、大きく胸にずしーんと来る。何度も取り出して聴きたくなる一作である。

最後はエディ・ヒギンズだ。本当は「アゲイン」を入れたかったのである。しかし「アゲイン」は彼の最高作として方々で推選されている。で、私はちょっと奇をてらった。これなら誰も推しはしないだろう。かなり勇気が要るものな。「新宿トワイライト」。真面目なジャズ・ファンはタイトルを見ただけで引いてしまうかもしれない。しかしニューヨークやマンハッタンがよくてなぜシンジュクが駄目なのか。と私はいちゃもんを付けたいのである。いや、私だって長い間のジャズ・ファンだ。いささかたじろぐところがないではない。しかし、聴けば、こんなふうにナイス・チューン。向こうのミュージシャンにしてみれば、我々のNYやマンハッタンと同じようにシンジュクはある種の魅力なのかもしれない。エディ・ヒギンズの感じるシンジュクの魅力がこの曲のそこかしこから滲み出てくる。ヘッドフォンでこの曲を聴きながらシンジュクの街を歩いたら、周囲の景色がバラ色に見えるんじゃないか。

寺島靖国